

「信仰は閉じ込められない」

使徒行伝 16章 16節～40節

説教 本庄侑子牧師

神様を信じて生きているのに、どうしてこんな辛いことが起こるのか。信仰者が地上を歩むうえで繰り返し問いたくなることです。パウロとシラスも、新しい気持ちで歩もうとした矢先にやる気を挫かれるような事態に直面します。

彼らは、占いの霊にとりつかれた女奴隷と出会います。女奴隷は、パウロたちのあとを追ってきて、「この人たちは、いと高き神の僕たちで、あなたがたに救の道を伝えるかただ」（17節）と叫びます。「いと高き神」といっても、たくさんいる神々の中で、ユダヤ人の信じる神を指す言葉であったにすぎず、彼女は占いによって運命を左右する力をアピールするために、パウロたちを利用していただけませんでした。

今日の日本社会でも、雑誌やテレビで星占いや血液型占いをよく見かけますし、悪運を遠ざけるためのラッキー・アイテムが紹介されたりしています。占いの背後にある考えは、現状がつかなくて変えたい、将来が不安だというものです。運命という見えない力があるなら、それをコントロールしたくなります。

しかし、聖書はそんなことをしなくてもよいと伝えます。目的をもって私たちを創り、生かしてくださいと神様がおられるからです。神様が私たちの人生に意味を与えておられます。その方に信頼して、与えられた場所で自分らしく精一杯生きればよいのです。パウロは、女奴隷にとりついた霊に向かって、「イエス・キリストの名によって命じる。その女から出て行け」（18節）と言いました。すると、その瞬間に霊が女から出て行きました。

女奴隷を使うことで利益を得ていた主人たちは、パウロとシラスを捕え、役人に訴えました。訴えを聞いた長官たちは、ふたりの上着をはぎ取り、むちで打つことを命じました。ふたりは、何度もむちで打たれた後、獄に入れられ、足かせをはめられました。

パウロとシラスは、神様を信じて捨て身の冒険に出たのに、投獄されてしまいました。ふたりは、獄の中で身動きもとれないようになりましたが、神に祈り、讃美を歌い続けました。旧約聖書の「詩篇」には、神様への喜びや信頼の言葉だけではなく、悲しみや嘆きの叫び、神を呪うような言葉もあります。もしかしたら、パウロとシラスも、「神様はどうして守ってくださらなかったのか」という叫びをあげたかもしれません。しかし、それらが神に対して捧げられたことで、讃美と祈りとな

りました。

彼らに起こったことは、礼拝に召される信仰者にもみられることです。私たちもそれぞれの歩みの中で、足かせをつけられるようなことがあります。そして、苦々しい思いや不自由さを抱えながら礼拝に集います。しかし、礼拝を通して、讃美や祈りの中で、心が天に向かいます。そして、御言葉を聞くのです。人の手で閉じ込められたとしても、天は開いています。あなたをつなぐものは、足かせではありません。神様がつながっていてくださるのです。

獄の中に閉じ込められたパウロとシラスにしても、そこにあるのは、人の悪意ではなく、神様の愛と恵みです。罪と死の力を打ち破って復活された主イエス・キリストが、獄においても、二人の主として、共にいてくださるのです。

獄の中には、過去に縛りつけられ、未来が閉ざされ、うずくまるしかなかった人たちがたくさんいたことでしょう。しかしそこに、パウロとシラスを通して、天からの安らぎと慰めの言葉が満ちていきました。そのとき地震が起こり、鎖が解けて、獄が開きました。囚われた人たちは、逃げようと思えば、逃げられるようになったのです。囚人が逃げてしまうと、獄吏が代わりに処刑されることになっていたので、見張りの人は自害しようとしていました。

パウロは、獄吏に「自害してはいけない。われわれは皆ひとり残らず、ここにいる」（28節）と言いました。逃げるのできるのに逃げない人たちを見て、獄吏は、パウロとシラスの前にひれ伏し、「先生がた、わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」（30節）と問いました。二人は答えます。「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます。」（31節）と。

獄吏は、パウロとシラスの傷を洗います。主の道を歩む中で負う傷は、その道の中で癒されるのです。獄吏とその家族は、ひとり残らずバプテスマを受けました。パウロとシラスは傷を受けて閉じ込められましたが、神様はそこで彼らを用いておられたのです。閉じ込められても、天は開いています。復活の主イエスが私たちをつかんでいて下さり、誰かの救いのために用いて下さいます。

（記 説教要約奉仕者）